

利用・用途・応用分野

膵がん治療、体外診断薬(遺伝子多型検査との併用)

目的・課題

膵がんは極めて予後不良ながんである。現在の膵がん化学療法は、FOLFIRINOX療法(「FFX療法」)、フルオロウラシル(「5-フルオロウラシル」「5-FU」)、イリノテカン、オキサリプラチン(「L-OHP」)及びレボホリナートカルシウム水和物(「I-LV」)の4剤併用療法が行われている。

FOLFIRINOX療法はがん治療後にごがん細胞が縮小又は消滅した患者の割合が高いにも関わらず、副作用の頻度の問題から使用率は10%程度で、イリノテカンを減量したmFOLFIRINOX療法が施行されている。

フルオロウラシル、イリノテカン及びオキサリプラチンの併用療法による膵がん治療における副作用発生リスク並びに治療効果の予測マーカーを提供することを課題とする。

解決ポイント

- ◆併用療法による膵がん治療における副作用発生リスクを精度良く予測できるマーカーとして、5種類の一塩基多型(「C11orf24遺伝子_rs901827」,「SLC14A1遺伝子_rs2298720」,「KRT74遺伝子_rs670741」,「HAUS8遺伝子_rs1130222」,及び「NFATC1遺伝子_rs754093」)を見いだした。
- ◆かかる5種類の一塩基多型のうち、3種類の一塩基多型(「C11orf24遺伝子_rs901827」,「SLC14A1遺伝子_rs2298720」,及び「NFATC1遺伝子_rs754093」)が併用療法による膵がん治療における治療効果も精度良く予測できるマーカーであることを確認できた。

研究概要・アピールポイント

- ◆フルオロウラシル、イリノテカン、及びオキサリプラチンの併用療法による膵がん治療における副作用発生リスクや治療効果を精度良く予測できるため、リスク(副作用)とベネフィット(治療効果)の予測を医師に提供することで、膵がんの治療方針(例えば、mFFX療法からFFX療法への変更、減量や別治療の選択)の判断を補助することができる。
- ◆当該併用療法による膵がん治療における副作用発生リスクを回避しつつ、より有効な膵がん治療が可能となり、膵がん治療の個別化医療に資するものである。

◆ お問合せ先 ◆

有限会社山口ティー・エル・オー TEL: 0836-22-9768 E-mail:tlojim@yamaguchi-u.ac.jp